

翻訳・解題：クラウディオ・マグリス 「あちら側から——国境をめぐる考察¹⁾」

山崎 彩

クラウディオ・マグリスは現代イタリアを代表する作家のひとりで、1939年に「アドリア海の袋小路」、トリエステに生まれた。ドイツ語文学者として大学で教鞭を執るほかに、日刊紙『コリエーレ・デッラ・セーラ』にも頻繁にエッセイを寄せ、1980年代後半からは小説も発表するようになった。1986年の『ドナウ』²⁾によって注目を浴び、この作品はバグッタ賞を受賞。その後も小説、戯曲、批評の執筆を精力的に続け、2014年にはカンピエッロ功労賞が、2016年にはフランツ・カフカ賞が授与されている³⁾。

トリエステは、20世紀に国境線の移動を何度も経験した町で、とりわけマグリスの少年時代には、どこの国にも帰属しないという特異な状況下にあった。第二次世界大戦後1947年から1954年まで、トリエステを含むジュリア地方⁴⁾全体が「トリエステ自由地域」として国連の管理下に置かれていたのである。さらに、この「トリエステ自由地区」は公式的には中立であったが、実際には英米軍の統治する「A地区」（トリエステ）とユーゴスラビア軍が統治する「B地区」（イストリア半島）とに分割されていて、「A地区」と「B地区」の境界がそのまま西側諸国と東側諸国との境界となっていた。そこで、第二次大戦直後、イタリア系住民を中心として多くの人々がユーゴスラビア領や「B地区」から逃げ出し、英米軍統治下のトリエステ市内へ難民として流れ込むということも起きた。エッセイの中でも述べられているように、マグリスが作家として「国境」や「境界」といったものにこだわり続けるその根源には、これらの原体験——定まらない国境、故郷を追われるようにして移動する人々——と、そこから生まれた「国境」や「境界」といったものに対する醒めた眼差しがある。

このエッセイは1992年、ユーゴスラビア紛争における戦火の拡大⁵⁾を背景に書かれたが、「境界」に対するマグリスの思考がもっとも明確に表現され、彼の作品を理解する上で重要な論考である。同時に、20年以上前に書かれたものでありながら、現在の大規模な人の移動、それによって引き起こされる排他主義の横行、国境が人々の自由な移動を阻止する障壁となることを予見し、これらの問題について多くの示唆を与えてくれる。そこで、今でも、いや、今だからこそ読む価値のあるエッセイとも言える。国境とは何か。境界線を引くとは、どのような行為なのか。以下にマグリスの抽出する「境界」の特徴を書く。

まず、境界とは両面的なものである。他者との出会うための橋ともなるが、他者を拒絶する障壁ともなる。それは諸刃の剣である。往々にして、自らとは異質の者を「あちら側」へ位置づけようとする強迫的な観念が働くことがある。だが、境界は必要なものである。それなしでは、すなわち区別のない状態では、アイデンティティも、形も、個人も、真の存在もないからだ。境界を画すること、それは混沌としたこの世界を言葉によって区切る作業であり、それ自体があるひとつの批判的思考の痕跡である。

次に、境界とは動き続けるものである。国境は移動され、消滅し、突如として再び現れる。移動するのは国境ばかりでない。虚偽と真実は、「それ自体ははっきりとした線によって分割されているが、しばしば歴史やイデオロギーによって消されたり、動かされたりする」。境界は人為的なものであり、パリンプセストに書かれては消される文字のように、何度も線が引き直される。例えば、作家もまた、書くことによって境界を画し、移動し、解消し、再構築している。価値や意味を解体し、否定し、提案する。それは境界線を絶え間なく移動することに他ならない。文学は「世界の、世界の枠組みの、世界のイメージの止むことのない解体と再構築が始まる地点」となる。

このような性質——すなわち、諸刃の剣であり、人為的に作り出されるもの——であるからこそ、人は境界に対して常にアイロニックな態度を取らなければならないとマグリスは説く。なぜなら、「アイロニーは識別し、分割し、再評価するが、自らについても再検討する」からである。マグリスは境界線を描く行為の例えに、「ほら吹き男爵」が流砂から逃れるために自分の辮髪を掴んで引っ張り上げた場面をあげている。「男爵」の矛盾した苦しい姿勢は、抜き差しならない状況の中で必要に迫られておこなわれた行為であることを示しつつ、一方では、この行為が滑稽な徒労にすぎないことを物語っている。マグリスは「しかし、このアイロニックな状況こそが彼の強さである」と述べ、アイロニーによって境界と対峙することを推奨する。マグリスによれば、文学は「虚偽と見える境界を打ち倒し、他のものを高く掲げ、悪への道を封鎖する」べく戦っており、アイロニーは「割れた腹筋の誇張や、ポストモダン的なミニマリズムに抵抗するゲリラ兵」となる。

エッセイは、国と国の間に目に見える形で存在する境界、すなわち国境についての考察で結ばれる。国境は、文学における境界よりもずっと直接的で暴力的な存在である。それは偶像崇拜の偶像と同じで、常に犠牲者の血を求めている。「近年では、国境に対する執着の蘇りと、猛り狂う本能的な排他主義の爆発が、おのおの自らの殻に閉じこもり、自分たちの特殊性に心酔し、他者との接触を拒否しながら、残酷な戦いを扇動している」。マグリスは言う。1989年のベルリンの壁崩壊以降、我々は新しい境界と壁——民族の、盲目的愛国心の、排他主義の——の建造に立ち会っている。そして、我々の未来には、数え切れない人々の移住という脅威が差し迫っている。この人々は、苦しみと飢えに突き動かされ、祖先からの土地と自らの境界をおそらく放棄するだろう。ヨーロッパの存在意義、あるいは、少なくともその尊厳は、将来的に起きるこれらの大移動にどのように応えることができるかにかかっている——。1992年、マグリスの展望する未来は明るくない。2019年、エッセイを読む私たちは、作家の想像が現実となった具体例を、残念なことにいくつも思い浮かべることができる。

あちら側から——国境に関する考察

クラウディオ・マグリス

訳：山崎 彩

ポーランドの作家レック⁶⁾は、パンチェヴォでドナウ川の左岸に立って対岸のベオグラードを眺めた時に、自分がまだ祖国に、我が家にいると感じたと語っている。というのも、そこはかつて旧オーストリア＝ハンガリー帝国の国境線だったからだ。崩壊して何年も経つというのに、彼は帝国を己の世界と見なし、岸辺の反対側から異なる世界が広がると考えていたのである。レックにとって、「あちら側」は川の向こう側から始まった。ポーランドのもうひとりの作家アンドロジェイ・クスニエヴィチュ⁷⁾も、レックの述べたことに言及してこの感覚を完全に共有すると書いている。クスニエヴィチュにとっても、消えた国境が自らの世界の限界となっている。両者にとってベオグラードは「あちら側」にある。

このふたりの場合、作家はどこが自分の場所か、どの境界の内側なら家にいると感じられるかはっきり理解しているようだ。だが、その他の、より多くの場合には、同一化は困難をきわめる。かつて学生としてフライブルクに住んでいた時、初めてストラスブルを訪れ、何人かの友人と、ある居酒屋へ入った。そこは、若者にとって、人生や生きる知恵を学べる真の意味での大学であった。62年から63年の冬のことだ。この時に導き手となったのは私たちよりずっと年上の紳士で、この居酒屋「ゴルデナー・アンカー」、「金の錨」の常連客であり、他の皆と同じようにシュヴァルツヴァルトのドイツ人で、だが、その人生は少々変わっていた。国家社会主義が政権を握った数年後、彼はドイツを後にした。必要に迫られてではない。彼はヒトラーお好みのアリア人種だったから。しかし、政治的な理由で、いやむしろ、まず倫理的な理由のためにドイツから去ったのである。だが人類全体に対する愛が勝ったとはいえ、祖国ドイツへの愛も消えることはなかった。そこで、その後のドイツの破局、崩壊、さらには故国の分割に対して彼の心の痛みが薄れることはなかった。ドイツとフランスの国境を越えた時、彼はドイツを忘れることも祖国に背を向けることも考えなかった。ただしその時は単純に以下のように感じていたという。ナチス体制が続くかぎり、自分の本当の故郷、いや、本当の居場所はあちら側にあると。

国境は二面的で、曖昧である。時としてそれは他者と出会うための橋となり、時として他者を拒絶するための壁となる。しばしば、誰かや何かをあちら側へ位置づけようとする強迫観念がつきまとう。文学は、「あちら側」という神話の偽りを暴くことを目指す旅でもある。すべての人が、時と場合よって、あちら側にもこちら側にも立ちうるということを理解するために——すべての人が中世の神秘劇のように「絶対的な他者」であるということを理解するために。トリエステの文学的な風景を創造し、トリエステがイタリアの一部となるために戦って命を落とした作家、シーピオ・ズラタベル⁸⁾は、『僕のカルソ』という作品の冒頭で、自分が何者であるかを言おうとして、気づく。彼の深いアイデンティティを表現するためには、それを創作しなくてはならないのだ。そして、自分は別人だと述べ、スラブ世界に属するどこか別の場所で生まれたのだと言わなければならない。スラブ世界、それは、トリエステのイタリア性とは相容れないものだ。だが、確かにトリエステ文化の一部を成している。

トリエステで私は生まれ、18歳まで暮らした。少年時代、そこは国境の町というだけではなく、町自体がたくさんの境界線からなる国境に見えた。それらの境界線は住民たちの人格の中で、あるいは人生の中で交差することによって、町中に線を引いていた。国境の線は、肉体を横切り、断ち切る線でもあった。それらは、傷や皺のように刻まれ、人を、身近にいる者からばかりでなく、自分自身からも切り離していた。

さらにトリエステの国境は東側との境界でもあった。かつては特にそうだった。友人たちと一緒にカルソ地方へ遊びに行った時に目の前に具体的に見えたのは、鉄のカーテン、世界をふたつに分ける境界であって、それは、自分の家から数キロ先を走っていた。この線よりも向こう側には、広大で恐ろしい、未知のスターリン帝国が始まっていた。それは、少なくとも1950年代初頭までは、足を踏み入れるのも困難な世界だった。しかし同時に、国境の向こう側の「もうひとつの」ヨーロッパに属するあの土地は、何年か前までは、つまり戦争終結後にユーゴスラヴィアが占領・併合する以前には、イタリア領だったのだ。だから私は幼年期にそこへ行ったこともあり、よく知ってもいた。その土地は、かつて、トリエステという世界、私の現実を構成する一部であり、今もそうだ。

つまり、国境線の向こう側には既知と未知とが同時に存在していた。そこには、見つけ出して既知にしなければならない未知があった。小さなときから漠然と理解していたことは、成長するために、自分のアイデンティティを完全に分裂させずに作り上げるために、自分はその国境を越えなければならないということだ——それも、パスポートのヴィザに頼って物理的にというよりは、国境の向こう側にある世界を発見し、それを自らの現実に統合させることによって、なによりも内面的に超えることが必要だった。

あの国境の向こう側には、別のヨーロッパが始まっていた。この「別の」という形容詞は、第一にスターリンの宇宙に属しているということに由来する。だが、同時に西側の無知を際立たせてもいる。子どもの頃、私はプラハがウィーンより東にあると信じていた。だから、そうではないことを学校の地図で発見した時は少々驚いたものである。このような無知は、しばしば、意識的・無意識的な軽蔑に彩られている。東側に位置するものは、しばしば暗く、不安をかき立て、ごちゃごちゃしていて品がない。「東側」を否定的に捉える傾向がある。メッテルニヒは、首都を貫いて走る幹線道路レンヴェークより向こう側にバルカン半島が始まると言ったが、「バルカン半島」という言葉は何か混乱した見分けのつかないもの、軽蔑されるべきものという意味で使われた。今日、ウィーンより何キロも西にあるウルムにおいては、町を横切って流れるドナウ川の向こう岸の町ノイ・ウルムでバルカン半島が始まると言う。もちろんこの場合も、褒め言葉ではない。

国境は橋であり、障壁でもある。対話を促す一方で、それを押さえつけもする。私の感情教育は、境界線の果てしない旅、境界線の横暴さ、不可避性によって特徴づけられている。これに関連して、例えば、かつてはトリエステが「小さなベルリン」であるという言葉もよく聞かれた。鉄のカーテンは非常に近いところあった。そして、少なくとも50年代の半ばまでは、トリエステの町をその後背地から切り離して、私たちの暮らしを分断していた。ときどき、人々は、国境上で生活しているというだけではなく、自分たちが国境であるという感覚を持った。だがベルリンとの比較は、文字通り真っ二つに分割されたゴリツィアの方がよりふさわしい。「まさ

にベルリンみたいですよ」とオーストリア系ゴリツィア人の公証人クライナー氏は、アルプス横断鉄道の駅の向かいにある家の窓を開けて、数メートル下にある鉄条網を指さしながら言ったものだ。

境界線の上に存在する町があるかと思えば、自らの中に境界線を抱え、それらによって構成される町もある。政治的な出来事によって、例えば後背地といった彼らの現実の一部や、あるいは、領土のその他の地域との強いつながりが断ち切られてしまう町もある。歴史が町の傷を広げ、町を世界の劇場に、つまり不条理の劇場にしてしまう。このような町においては、特に激しいやり方で、境界の二面性が、そのポジティブな部分とネガティブな部分を実験される。境界は、開いて／閉じている、硬直し／柔軟である、時代錯誤的に存在し／押し倒される、防衛的／破壊的である。

トリエステでは、確実なものなど何もないという感覚、どこにも所属していない、よそ者だという気分すべてが支配されていた。人生の中心にしながら同時に辺境に生きているという矛盾した感覚があった。1954年までアメリカとイギリスが管轄する自由地域であったこの町は、イタリアの一部であり、またそうではなかった。将来を悲観することは、他の場所よりもずっと簡単だった。そして、自分たちが何者なのか、何なのかさえよくわからなかった。そのために、みんな、自分たちのアイデンティティを演出し続けなければならなかった。集団的な意識は、境界線によって、あらゆるところから押しつぶされそうになっていた。一方で、人々は新しい境界で自分を熱狂的に守った。それは、正確な所属から逃れるためであり、この悪化した異質性に頼ってアイデンティティを作り上げるためであった。イタリアの町であり、イタリアへの情熱を激しく燃やしながらか生きてきた。だが、町の愛国者たちは、しばしばドイツやスラブに起源がある名前を持っていた。プラハのドイツ愛国主義者たちがチェコ語の名字を持ち、その逆もあったように。あるいは、ダルマツィア半島のクロアチア併合主義のリーダーたちのように。彼らは、19世紀にスプリットのカフェに集い、クロアチア人の権利回復のためのもっとも過激な行動計画書をイタリア語で起草したのである。非常に独特な方法でイタリアの一部だと思っている町であって、そのために、イタリアの他の地域の人々からは理解されてないと感じることがしばしばあった。だからこそ、自らをもっとも「本物の」イタリアであると見なすようになる。まるで、地政学的にも、想像の上でも重要なもうひとつの境界、イゾンツォ川⁹⁾の向こう側には、正式ではあるけれども、それゆえに、本物さが足りないイタリアが始まる、とでもいうように。

この町は、多民族——ドイツ人、そして／あるいはオーストリア＝ハンガリー人、ギリシア人、セルビア人、クロアチア人、アルメニア人——によって構成され、それを誇ると同時に疑念をもくすぶらせたが、中でも特にスロヴェニア人グループは、一方〔イタリア人〕からは無視され、他方〔スロヴェニア人〕から誇張される、ある種の両義的な秘密であった。何度か、町を散歩しながら私は自問した。どの舗石から——スロヴェニアのナショナリストたちが強調して言っていたように——スラヴィアが始まるのだろうか、と。その国は何千キロにもわたり、アジアまで広がっていた。もしかすると文化的にも経済的にも繁栄を誇っていた時代、つまり20世紀初頭からトリエステは既に閉ざされた町でもあったのかもしれない。ジョイスはそこにダブリンとアイルランドを再び見出した。強迫観念としての祖国、耐えられないが、忘れがたい、亡

命者にとっても詩人にとっても必要な場所。この町は母親の胎内と同じ。人はそこから逃げ出すが忘れることはない。常に悪く語られ続けるように、いや、まず、語られ続けるように仕向ける町である。

トリエステのさまざまな側面のなかで際立っているのは、それがユダヤ人の町でもあるということだ。ユダヤ人は、文化・経済・政治の発展に決定的な役割を果たし、すっかり町に溶けこんだ。そして、町がイタリアを選ぶことに対しても率先して動いた。一方で、中欧からの文化を導入したのも彼らである。このことは、ユダヤ系の人々なしには考えられない。トリエステはユダヤ主義のもっとも重要なセンターのひとつであった——しかし、それは1938年の人種主義法をもって終焉を迎える——。

トリエステでは、時間の境界も、かつては何かしらの違いがあった。それは、移動し、前へ行ったり、後ろへ下がったりした。トリノ大学で勉強している頃、時たまトリエステに戻ると、毎回、異なる時間システムに入るような感覚があった。時間は、短くなったり、長くなったり、ねじれたり、塊となって手で触れることもできるのではないかと思えた。霧のように、消えてしまうこともあった。1948年、共産主義と反共産主義が最終対決をした際の宿命的な選挙戦の頃には、1918年、つまり第一次世界大戦の終結後にトリエステがイタリアの一部になった年はとても遠くのことに思え、歴史的記憶の一部であった。それは、既に完結した歴史の一章で、議論や感情的な対立を引き起こすはずがないものだったのだ。何年か後に、この過去は突如としてアクチュアルなこととなった。現在と結びつき、何らかの方法で再び現在の一部となって、その時の政治や現実と絡み合った。

このようなもつれの経験のために、人々は早熟な「覚醒」を、冷めて懐疑的な姿勢を持つようになった。それは、歴史の直線的な進歩に対するどのような信頼にも向けられた。このアドリア海の袋小路、海があらゆる幻滅を岸辺に運んでくるこの地で、現実の社会主義に対する多くの幻想が、他の土地よりも先に打ち砕かれた。1945年から48年の間に多くのことが浮かび上がったが、他の場所では、それは56年か68年に明らかになったことである。その中には、ひょっとしたら、1989年にほとんどすべての人を驚かせた共産主義の崩壊への予兆もあったかもしれない。だが、この早熟な覚醒は、後続する別の幻想、つまり共産主義の崩壊がすべての問題を解決するだろうという考えに対しても、早々に警戒体制に入ったのである。おかげで、我々の何人かは、死に体の共産主義に鞭を打つという恥ずかしい行いを免れた。1914年のごたごたが、腐りはてた姿で再び現れるのを目の当たりにしても、ひょっとしたら人々の驚きはさほど大きくなかったかもしれない。そして共産主義はやはり大きな遺産を遺したと皆が気づいたのだ。それは、共産主義が与えた答えではなく、共産主義が提示した問いという遺産である。

国境は移動され、消滅し、突如として再び現れる。それによって、「ハイマート」、故郷と呼ばれるものの概念も、不確かな様子で変形する。町も個人も、しばしば「元」という言葉でくられるようになる。こうした居心地の悪い体験、世界を喪失する経験は、政治地理学のみならず、人の人生全般にかかわる問題である。私のシュターデルマンが言っていることだが¹⁰⁾、すべての人は、“元～”である。本人はそれを知らないかもしれないが。

私は、人生と歴史について、物語ることと誤解の間にある関係について書いてきたが、その最初の経験は、グロテスクで苦しみに満ちた国境の移動にさかのぼる。私は小さな時に、偶然

にも「コサック国」の目撃者となった。コサック国とは、第二次世界大戦中にドイツ人たちが同盟のコサック部隊に約束したもので、悲劇的な結末を迎えるまでの数か月間、イタリア・フリウリ地方の中でも特に荒涼としていて貧しい地域であるカルニアにあった。

その土地に、コサック人たちは自分たちのテントばかりか、彼らの慣習も運んできた。自分たちの過去、自分たちのステップ高原をあの地方に移動させたのである。彼らは、カルニアについては、その少し前までは名前を聞いたこともなかった。コサック人たちは、自由のために闘っていると自負し、最も凶暴な独裁者〔ヒトラー〕に奉仕した。探し求めてきた故郷の名の下に、そして、安住の地を、自分たちの不変かつ不動の境界を見つけたいという欲求のために、彼らは他の人々から故郷と境界を略奪したのである。

このコサック人の物語は、真実と虚偽の間を走る境界線がどれほど不確実であるかということを示している。だから我々の役割は、絶え間なくそのラインを確定しようと努めることだ。舞台上演じられる真実は、しばしば、反転する。真実は、仮面を付けられ、虚偽に変身する。この場合も、境界は、気づかぬうちに越えられるか、混乱させられている。虚偽と真実の境界それ自体は、聖書における「是」と「非」のように、はっきりとした線によって分割されている。だが、それはしばしば歴史やイデオロギーによって消されたり、動かされたりする。

私の感情教育を特徴づけているのは、失われた後に求められた境界、現実や心の中に再構築された境界の経験である。あの謎に包まれたコサック人の国を目撃した後、私にとって決定的だったのは、第二次世界大戦終了後に30万人のイタリア人がイストリア半島を放棄して「脱出」した出来事である。チトーのユーゴスラヴィアは、激しい抵抗戦争によって自由を勝ち得た後、スラブ人の土地を取り戻しただけでなく、イストリア半島とその中心都市フィウメを含むイタリア人の土地も併合した。それより前には、スラブ人たちはイタリア人のファシストに抑圧されていた。あからさまなファシストというよりは、単なるナショナリストであった多くのイタリア人も、スラブ人の権利を過小評価していた。全体主義に対するユーゴスラヴィア人の蜂起は、暴力に満ち、相手を選ばなかった。恐怖と脅しと殺人に彩られた終戦直後の数年間に、約30万人のイタリア人が、ばらばらの時期に土地と家とを残してイストリア半島から離れ、世界を放浪し、また、何年も難民キャンプに暮らすはめに陥った。すべてを失ったこの人々は、しばしば彼らの悲劇を理解されず、無視され、結果として自分の心の中に生まれたまた別の境界の中に閉じこもることになった。それは、苦しみと怒りからなる境界線で、これらの「脱出者」を失われた土地から切り離すだけでなく、しばしば、脱出先の場所、彼らを見捨て、彼らを部分的に外国人であると感じさせた場所においても孤立させた。

だが、それらの脱出者の中でもさらに複雑だったのは、脱出の悲劇とイタリア本国の無理解に苦しみ、彼らを追い出したスラブ人のナショナリスティックな暴力に怒りを感じながらも、イタリアのナショナリスティックな感情に同調できない人々の気持ちだった。彼らはスラブ人たちを無差別に否定することができず、イタリア人とスラブ人との対話にこそ自分たちの正しいアイデンティティがあると考え続けていた。彼らは、イストリア半島とアドリア海という世界を、イタリア人だけのものでもなければスラブ人だけのものでもない、混合の世界であると見ていた。そこで、スラブ人のナショナリストからも、イタリア人のナショナリストからも敵視され、また別の境界線によって取り囲まれて精神的な無人地帯に追いやられたのである。

イタリア東部の境界線は、さらに別の人々の移住の舞台ともなった。この移動は、人数的にはずっと少なく、だが、もっと黙殺された、悲劇的なものである。このことは、自作の『もうひとつの海¹¹⁾』、『ミクロコスモス¹²⁾』においても言及したが、モンファルコーネ出身で、共産主義に同調してファシストの監獄やドイツ人の強制収容所も経験した二千人の労働者たちの事例である。この人々は、イストリア半島の人々がイタリアへ「脱出」していた時期に、共産主義による国家建設に協力するために、イタリアからユーゴスラヴィアへ移住したのである。チトーがスターリンと決別した時、このモンファルコーネの労働者たちはスターリン主義者として迫害され、二カ所の矯正収容所に入れられ、ありとあらゆる暴力を受ける。彼らはスターリンの名の下にそれに耐えた。彼らにとって、スターリンは理想そのものだった。その後、イタリアに戻ったこの人々は、共産主義者であるということで虐げられ、過去のスターリン主義を思い出させる都合の悪い証人としてイタリア共産党からも疎まれることになった。そこで、また再び、彼らはあちら側へ追いやられた。彼らは、間違った時に間違った側について、もっとも冷酷で凶暴な境界に取り囲まれることになった。

このような境界の経験がなければ、私の書いた本の多くは生まれなかっただろう。『ドナウ』は全体を通して境界の本である。境界を越えようとする旅、その境界は、国境だけではなく、文化的、言語的、心理的なものでもある。さらに、もし、アイデンティティを構成する集合体の、不安定で難しい要素をも受容し、理解したいと望むなら、外側の現実における境界と同時に、ある人の内側にある境界、その人間性の隠れた暗いゾーンを分ける境界をも越えなければならない。

それは、困難な旅の記録である。うまく目的地にたどり着くこともあれば、途中で遭難することもある。ドナウの旅人は時に国境を越えることができる。他者の恐れや拒絶に打ち勝つことができる。そううまくいかないときもある。そんな時、彼は自らの先入観、恐怖、不安に捕らわれて自分の殻に閉じこもってしまう。『もうひとつの海』も、多くのフィジカルかつメタフィジカルな境界からなる本だ。土地の、海の、人生の、死の、意味の、無の境界。

すべての境界は、不安と、安心を求める気持ちとに関係している。境界線は、必要だ。これがなければ、アイデンティティもなく、形も生まれない。これがなければ、個人も存在しないし、真の存在というものもない。というのもすべてが、無形で区別できないものになってしまうからだ。境界線は現実を構成する。輪郭を与え、個人的で集合的な、実在的で文化的な特性を明確にする。境界は形であり、だから技法でもある。ディオニュソスの文化においては、躍動するマグマの中に「私」が溶けることが宣言される。これは解放的であるはずだが、実は、全体主義的である。なぜならば、抵抗とアイロニーの能力を主体から奪い、主体を暴力と消去の危機にさらし、価値観を伝達する要素をゼラチン質で非文明的な塵芥の中に分解してしまう。「私」は、「ほら吹き男爵」のように、流砂から逃れるために、自分の辮髪を掴んで引っぱり上げる必要がある。彼は、自分の辮髪と、その矛盾した苦しい姿勢だけを頼みの綱としている。だが、このアイロニックな状況こそが彼の強さである。アイロニーは、硬直した強制的な境界を解体し、人間的で柔軟かつ強靱な境界を作る。アイロニーは、ごたまぜの神秘主義や、衝動的な全体主義の集合に抵抗する。なぜなら、アイロニーは、識別し、分割し、再評価し、自己の再評価もするからである。アイロニーは、割れた腹筋の誇張やポストモダン的なミニマリズムに抵抗す

るゲリラ兵である。柔軟だが強い力である。

『オデュッセイア』は、本の中の本、小説の中の小説であるが、まずは、境界と、自らのパーソナリティーを作り上げる個人の叙事詩とすることができる。別の言い方をすれば、その個人は、自我を分解しようとする自然の無差別で、魅惑的で、破壊的な流れに抗して自らの人格の境界を画する。「私」は、異なるものとの出会いの中で豊かになってゆくが、その異なるものの中に吸収されたり、それによって消去されたりすることはない。対話は、対話者をひとつにするが、彼らが分けられていること、彼らの間にごく僅かの、だが取り除くことのできない豊かな距離があることを前提条件とする。

現代においては、ふたつのオデュッセイアのモデルが可能性としてあげられる。第一は、ホメロスからジョイスへと至る伝統的かつ古典的な例に従い、循環する旅としてのオデュッセイアである。言い換えれば、出発し、世界を巡った後に、旅の中での経験によって人間的により豊かになって、またもちろん変わって、しかしアイデンティティを確固としたものにしてイタケーへ、故郷へ帰還する個人の旅の記録である。戻ってきたとき、主人公はより深いアイデンティティを持ち、自らの人格に強固で安定した境界を得ている。その境界は、世界に対して閉ざされることなく、かといって、カオス的な区別のない状態に溶解していることもない。

他方、例えばムージルの例のように、直線的なオデュッセイアもある。その旅において、個人は故郷に戻ることはない。無限と無に向かって直線的に旅を続ける。その中で、主人公は道に迷い、自らの様相も根本的に変え、別の人間になる。そして、自らのアイデンティティのどのような境界をも破壊する。ムージルは、個人の爆発を語った。言い換えれば、個人に形と輪郭を与えるはずの蝶番が外れてしまったことを語った。特に、『特性のない男』の中のふたりの登場人物モースブルガーとクラリッセは、個人とは言えない。むしろ、欲動の集合、集団的な夢、あるいは、自我と現実との目の回るような一体化とでもいうものである。現実の中で、個人はあふれ出し、迷い、自らと世界の間に境界を画することもできない。

これらすべての文学の背景には、明白であれ仄めかされているだけであれ、ニーチェの偉大な教えがある。彼は、個人の偽のアイデンティティすべてを爆破して破壊した。彼はそれらを「原子の無秩序」の中に分解してしまった。そこにおいては、伝統的な個人の主体という構造、記憶できないほど昔から自らの境界を苦心して作り上げてきた主体性が、既に解体されそうに見える。主体は、自らの境界を失い、まだ正確には定義できない何らかの複数性、文化人類学的に見て新しい段階へと変貌を遂げた。もっとも偉大な近現代の文学の多くは、「私」と自らの境界との二重の関係性、言い換えれば、自らの境界の消滅（言語的にも）と硬直化によって特徴づけられる。どちらも致命的である。

必要なのは、アイロニックなアイデンティティだ。それは、閉じてしまおうとする、あるいは、それを乗り越えようとする、どちらの強迫観念からも解放される能力を持つ。境界の作家は、スキュラとカリュブデイスの間、ひとつにまとまるアイデンティティというレトリックと、はっきりとしないアイデンティティというレトリックの間を進まなければならない。前者、険しい目つきでにらみをきかせる、境界——イタリア性の、スロヴェニア性の、ドイツ性の——の番人のような作家については、皆が知っているし、軽蔑している。だが、後者の、もっと高貴な立場で境界に戦いを挑む作家たちも、しばしば境界の別のレトリック、なんとしても境界を否定

したいという欲求の犠牲者である。彼らは常に「あちら側」に立つ。そして、例えば、トリエステにおいて、スロヴェニア人たちの中のイタリア人であると、またその逆にイタリア人たちの中のスロヴェニア人であると感じる。あるいは、チロルでは、イタリア人憲兵隊と共にいるドイツ人であるとか、ドイツ系の南チロル人たちと一緒にいるイタリア人であると思う。

このような立ち位置は、民族間にとげとげしい紛争の雰囲気がある時は、政治的に価値がある。だが、ステレオタイプの公式、都合の良い文学的アリバイとなる危険をはらんでいる。そして、彼らが否定することを望む境界についてのトポスに身を委ねることや、アイデンティティに対する強迫観念的な問いに終わってしまうのである。その問いは、結果的に、どんな明確なアイデンティティも認めないことを表明する。境界文学の情熱的な問題作であっても、自らの無所属性を宣言することに拘泥し、古くさい常套句のレパートリーのひとつになってしまうこともある。まるで、役に立つさまざまな韻を提案する準備の整った、かつての押韻辞典のように。自分の生まれた場所に対する烈しい批判は、甘ったるい賞賛よりはましであるとしても、容易にすり切れたトポスになりうる。トリエステを風刺するトリエステ作家、プラハに対して情け容赦のないプラハ出身の作家、ピエモンテ臭さを懸命に拭い去ろうとするピエモンテの作家、みんな、真の解放と、月並みな心情吐露との間で、不安定にバランスを取ろうとしている。

アイデンティティの強迫観念から解放されるもっとも良い方法は、アイデンティティを仮の、近似の状態で受け入れること、そして自然に、あるいはそのことは忘れて生きることだ。自分の性別や、戸籍、家族をいつも考えて生活していないように、同様に、人生についても考えすぎないようにして生きるべきだ。境界の相対性を自覚してさえいれば、自らの境界線を受け入れるのが良い。自分の家の境界線を受け入れるのと同じだ。

このようにシンプルに愛情を持って生きれば、境界線は人格を強化するものになる。ダンテが言ったことだが、魚にとって海がそうであるように、私たちの故郷は世界だ。だが、アルノ川の水を飲んだから [フィレンツェで育ったから]、ダンテはフィレンツェを強く愛するようになった。世界の海とフィレンツェの川、ふたつの水は出会い、混ざり合う。だが、その境界を消すことはなく、互いに補い合う。どちらかひとつが欠けたものは、偽物だ。海に属するという感覚なしに、アルノ川にしがみつくとのは、退行的な狭量というものだし、自分の生まれた町に流れる川に対する具体的な愛情なしに海に言及するのは、内容のない抽象化となる。

根を下ろすことと遠くへ行くことを血で結ばれた共生の関係にしたのは、特にディアスポラを経験したユダヤ文化だったのではないだろうか。我が家への愛を抱きながら、彼らは放浪の旅を続けた。旅の中では、宿屋の没個性的な部屋や駅の待合室、わびしいカフェが臨時の家となった。それらの場所は亡命生活の休息地、約束の地へ向かう道のりの休憩地であり、つかの間ではあっても、具体的な真の祖国の境界だった。

私は亡命文学に関する自分の本のタイトルを、ある東欧ユダヤ人の小話から付けたが、その話はこんな風だ。東ヨーロッパのとある町で、あるユダヤ人が、多くの荷物を抱えて駅へ向かう別のユダヤ人と出会った。彼がどこへ行くのか尋ねると、そのユダヤ人は「南米に行く」と答えた。「なんとまあ！」と最初の男は言った。「遠くに行くんですねえ」。すると、言われた方は驚いた顔で答えた。「どこから遠いんですか？」東欧ユダヤ人には祖国がない。だから、近い遠いを判断するための参照点となるべき場所を持たない。そこで、このユダヤ人は、すべての

物と人から遠い。また、歴史的・政治的な祖国を持たないので、国境も持たない。しかし同時に、彼は自分の中に、彼が受け継いだ伝統や行動原則の中に、自らの祖国を持っている。それらは、彼の中に根付いている。だから、彼が家から遠いことは絶対でない。彼は常に自らの国境の内側にいる。このようにして、先のユダヤ人は、世界に開かれた橋となる。

国境が他者を追い返す障壁となる場合、それは偶像となる。自らのアイデンティティへの強迫観念は、境界に取り囲まれれば取り囲まれるほど、不可能な、退行的な純粋性を追い求めるようになり、行き着く先は暴力だ。旧ユーゴスラヴィアの残酷かつ愚鈍な紛争はその極端な例である。とはいえ、ヨーロッパで唯一というわけではない。すべての偶像がそうであるように、国境もしばしば血の捧げ物を求めるが、近年では、国境への執着の蘇りと、猛り狂う本能的な排他主義の爆発が、おのおの自らの殻に閉じこもり、自分たちの特殊性に心酔し、他者との接触を拒否しながら、残酷な戦いを扇動している。「違う」ということは、普遍的な人間性のひとつとして再発見され、正当にも高く評価されているが、それを硬直的に絶対視すると、人間性を否定し、破壊することになる。このような盲目的崇拜に対しては、ニーチェの言葉を捧げよう。言葉通りに受け取れば誤解されそうだが、真実の輝かしいメタファーである。「なぜ隣人に敵意を持つのか。私にも私の祖先にも愛すべき要素がこれほど少ないのに？」

国際協定や武力によって確定される境界線は、国や国家の間のみにあるわけではない。ズヴェーヴォの言うように、毎日書き散らしているペンも、境界を画し、移動し、解消し、再構築する。それはアキレスの槍のように、傷つけもするし、癒やしもする。文学はそれ自体が前線であり、新しい前線や、その移動や、その定義を探し求める探検旅行である。あらゆる文学表現と形式が、数えきれないさまざまな要素、緊張、動きの出発点であり、意味とシンタクスの境界の移動が開始される場所である。そして、現実の場面と背景が何度も並べ直される撮影スタジオのように、世界の、世界の枠組みの、世界のイメージの止むことのない解体と再構築が始まる地点でもある。知ると知らずとにかかわらず、望むと望まざるとにかかわらず、どんな作家も境界人であり、境界に沿って動く。価値や意味を解体し、否定し、提案する。休みなく動き続ける運動によって、万物の意味を分類したり、分解したりするが、その運動とは境界線の絶え間ない移動に他ならない。

書くことは、境界線とその移動、消失に働きかける。道徳的な責務、日々の正しい戦いは文学にも浸透し、境界線を定めて守るように命じる。虚偽と見える国境を打ち倒し、他のものを高く掲げ、悪への道を封鎖する。国境のない、区別のない世界は、ドストエフスキーが恐怖と共に思い描いたように、「全てが許された」恐ろしい世界、全ての暴力と権利乱用が許される世界になるだろう。この意味で、人々は境界に対して戦うのだが、それは別の境界を創建するためである。

他方で、ある物がもうひとつの物の中に消えていく瞬間、世界の止むことのない変貌——それは人生の精髓そのものだ——は、魅力的だ。それは、境界の克服の連続から成り立っている。私は、さまざまな色が混ざり合いながら消えていく瞬間に魅了されてきた。色の変化は、特に水に関しては、人生の意味と、それをつかみ取ろうとする詩の表象そのものとなる。旅という、私がこだわり続けている語りの構造もまた、ひとつのリズムによって展開するが、それは、境界が移り、消え、色が変わる一連のリズムである。非常にしばしば旅は、水の上で——川に沿っ

て、ラグーナに沿って、川と海の出会う場所で、境界のない絶対の中への内在的な誘惑と破壊を象徴する真昼の海の反射の中で——展開するが、それも偶然ではない。

川の水と海の水が出会う場所の繰り返されるイメージは、この色の移り変わりに魅了されていることの証かもしれない。

だが、どのような物語も、人生に形を与える、つまり、境界を画するのだ。色の変化の魅力が意味を持つのは、その変化のめまぐるしさにもかかわらず、たとえ一瞬であっても、見分けのつかない状態からその瞬間を救い出し、イメージを固定させようと努力する時だけである。文学は感情や情熱の動きの分析でもある。連続した両義的なプロセスの分析である。そこでは、ある感情は、隣り合う別の感情の中に溶け、最後にはしばしば、反対の感情にひっくり返ることもある——この場合にも、境界を越境すること、また、境界の必要性和不確実性を発見することが関係している。

文学は限界を超えることを示す。だが、限界を記述することから成り立っている。それらの限界がなければ、より高く人間的な何かにたどり着くためにそれを越えようとする緊張も存在し得ない。私たちの歴史的な現在の国境線は、残念ながら、文学とだけではなく、むしろ、もっと暴力的で直接的な次元と結びついている。ユーゴスラヴィアで起きたことは、過去と歴史の恐るべき重みを、何世紀も続く憎しみと分断の境界のはなはだしい力を明らかにした。壁や国境を打ち倒し、新しいヨーロッパの統一を創造する可能性を作り出した1989年の偉大な解放の出来事の後、私たちは新しい境界と壁——民族の、盲目的愛国心の、排他主義の——の建造に立ち会っている。さらに、私たちの未来には、数え切れない人々の移住という脅威が差し迫っている。この人々は、苦しみと飢えに突き動かされ、憎しみと恐怖を引き起こしながら、祖先からの土地と自らの境界をおそらく放棄するだろう。そして、彼らは彼らで新しい壁を築くことになるだろう。ヨーロッパの存在意義、あるいは、少なくともその尊厳は、これらの世紀の大移動に対してどのように応えることができるか——その返答は、嫌悪や感情的な衆愚政治からは自由であるべきだ——にかかっている。

グラードの詩人ピアージョ・マリン¹³⁾は、1915年にはイタリア併合主義者であり、イタリアがハプスブルク帝国を破壊するために戦争するべきだという彼の考えをウィーン大学の学長に誇示したりもした。その後、イタリア国軍に召集されるが、無礼な大尉に抗議して「ぼくらのオーストリア人」はそんな流儀を持っていなかったと言ったそうだ。このマリンのように——あるいは、私がフライブルクで遠い昔に知り合ったあの紳士のように——、あちら側にいると感じる能力、あちら側へ行く力を持っているべきだ。皆が自分の国のナショナリズムを恥じるべきだ。自国のナショナリズムに関しては、どの人も、常に少しは有罪である。

ユーゴスラヴィアは、そこら中に密かに広がっている死に至る病の、人目を引く一例にすぎない。何年も前に、スロヴェニアとクロアチアの国境を示す杭が、誇らしげな情熱に包まれて建てられるのを見たとき、私はエストニアとリトアニアの友人たちが語ってくれた話を思い出した。1929年か1939年に、リトアニアの数人の学生がエストニアに入り、スールムナマギに登った。バルト三国の最高峰である丘で、海拔317メートル、リトアニアの一番高い丘よりも4メートル高かった。リトアニアの学生たちは、この4メートルをシャベルですくって取り除いた。最高峰の称号をエストニア人から奪うためだ。だが、エストニア人たちはすぐに丘を修復して、

頂上に4メートルの土砂を盛り、さらに塔まで建てた。高さにおける境界というものも存在するのだ。そのような境界は、全ての国境と同様に、廃墟の集積に過ぎない——ちょっと前のベルリンの壁のように誇らしげに建造される場合にも——と見なすべきだ。そして、私たちの仕事は、そのような廃墟を一掃して、あまり邪魔にならないところに積み上げることだ。1945年に有名なベルリンの「廃墟の女性たち」がしたように。

ほうきを持って廃墟や崩れ落ちた壁を掃く女性は、境界の天使のシンボリックな、理想の姿である。だがありそうにない姿でもある。私たちの視野には、銃を持った狙撃兵が浮かび上がる。彼らは、バベルの塔のようにどんどん高くなる境界の後ろに待ち伏せている。世界における現在の非現実性の中では、ニーチェの以下のような質問に答えるのはますます困難になっている。「私はどこで我が家にいると感じられるのか？」

注

- 1) C. Magris, "Dall'altra parte. Considerazioni di frontiera", in C. Magris, *Utopia e disincanto*, Milano, Garzanti, 1999, pp. 51-65. 初出 "Chi è dall'altra parte? Considerazioni di frontiera" (「あちら側にいるのは誰か? 国境に関する考察」), «Nuova Antologia», aprile-luglio, 1992, pp. 50-61.
- 2) C. Magris, *Danubio*, Milano, Garzanti, 1986. 邦訳『ドナウ:ある川の伝記』池内紀訳, 東京, NTT出版, 2012年。
- 3) <https://ricerca.repubblica.it/repubblica/archivio/repubblica/2016/10/28/magris-e-il-primo-italiano-a-vincere-il-premio-kafka38.html> (2019年4月30日参照)。
- 4) ジュリア地方とは、ゴリツィア、トリエステ、トリエステの東にあるイストリア半島（現在はスロヴェニア領とクロアチア領）、イストリア半島の東側に位置する都市フィウーメ（現在はクロアチア領リエカ）を含む地域で、もともとオーストリア領であったが、第一次世界大戦後にイタリアへ編入された。
- 5) 1991年にスロヴェニアが独立宣言をして「十日戦争」の後に独立した。同時に独立を宣言したクロアチアは1995年まで内戦状態となった。1992年にはボスニア・ヘルツェゴビナが独立宣言をし、内戦状態となった。ボスニア紛争も1995年には終結するが、1996年にはコソボ紛争が始まっている。
- 6) 訳注：Stanisław Jerzy Lec (1909-1966)。
- 7) 訳注：Andrzej Kusniewicz (1904-1993)。
- 8) 訳注：Scipio Slataper (1888-1915)。
- 9) 訳注：トリエステの西を流れる川。
- 10) 訳注：Carl Stadelmann (1782-1844) はゲーテの執事だった。マグリスはこの人物を主役にした戯曲を書いている。
- 11) C. Magris, *Un altro mare*, Milano, Garzanti, 1991.
- 12) C. Magris, *Microcosmi*, Milano, Garzanti, 1997.
- 13) 訳注：Biagio Marin (1891-1985)。

